

若狭地方の農村住宅の架構形式の変遷

The Process of Transformation of Framing System in Wakasa Farmhouse

奥田 徹*
(福井大学工学部)

玉置 伸悟**
(福井大学工学部)

1. はじめに

現代の木造軸組工法による瓦葺きの木造住宅の屋根架構は一般に「和小屋」と呼ばれる梁と束による架構をとることが多いが、破風面に現れる梁・束・貫による構成は地域的な特色があると同時に、その小屋梁の配置の仕方も地域によって一定のルールがある。このことは住宅の軸組みのなかにもその地域の大工そして住まい手の両者に共通した価値観が反映されているためと考えられる。本研究では「テンピン」*1と称する長さの異なる小屋梁を幾重にも積み重ねた屋根架構を現在の新築住宅においても残している福井県若狭地方の上中町周辺の農村住宅を対象として、その特異な架構形式の成立過程を明らかにする。資料は平成11年4月から8月にかけての現地調査から作成しており、うち架構図を採取したものは16例である。

2. 新築住宅の架構形式

図1は上中町有田で採取した平成11年現在新築中の住宅であり、梁間4間の切妻屋根の例である。主屋の棟通り中央に2本の柱が建ち、「ダイドコロ」側を「大黒柱」と呼び、座敷側を「長者柱」と呼ぶ。「大黒柱」は尺角の大きさがあり「長者柱」は8寸角の大きさがある。ともに通し柱であり「ハリ」と呼ぶ小屋梁を直接支えている。その「ハリ」の上部には長さの異なる3本の梁が短い束を介して積み重ねられ、それらは上より長さに応じて「1間テンピン」「2間テンピン」「3間テンピン」と呼ばれている。両妻面も同様の架構がなされ、都合2間間隔にこの架構が繰り返されることになる。また「1間テンピン」中央桁行きを「地棟（あるいは本地棟）」と呼ぶ梁で繋ぎ、「ハリ」上端の高さで中央に「下地棟」、左右1間離れた位置にこれと平行に「梁挟み（挟み梁）」が桁行きに渡される。この都合4本の桁行き梁は末口で尺φ以上の1本ものの丸太材である。また先の2間間隔の「ハリ」を等分する位置に、「ウシ」と呼ばれる幾分上反りの梁が「下地棟」「梁挟み」の間を通るように渡され、これにも「1間テンピン」「2間テンピン」が載せられる。従って3重、4重に重ねられた梁が1間おきに計7組並ぶことになる。この地域の新築住宅においてこの屋根架構は決して立派な造りではなく、農村部においてはごく普通の作り方であり、調査中遭遇した建築中の住宅の5例全てがこの方法によるものであった。またこの屋根架構は両妻面を除いては全て天井裏に隠されてしまうことになる。

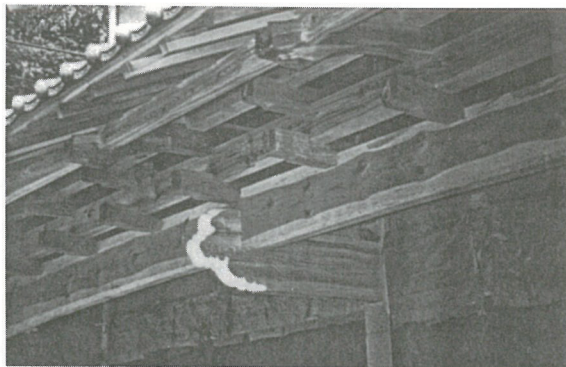


写真 玄関前の底下屋の架構(上中町有田 図1)

キーワード：木造軸組工法、屋根架構、若狭I型、茅葺き、テンピン

*Tooru OKUDA Dept. of Architecture and Civil Engineering Faculty of Engineering Univ. of Fukui

**Shingo TAMAKI Dept. of Architecture and Civil Engineering Faculty of Engineering Univ. of Fukui

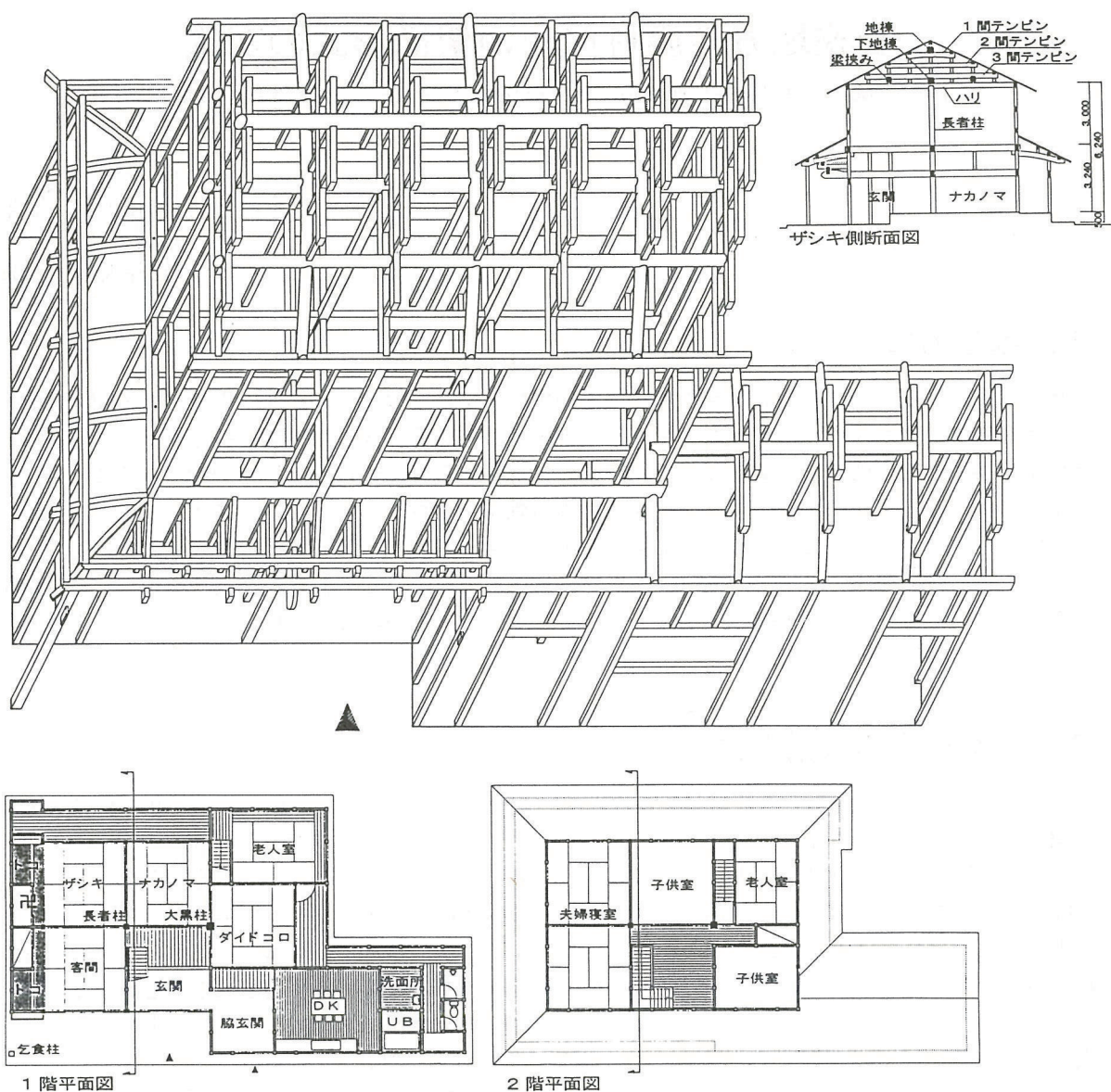


図1 上中町有田

この屋根架構とともにこの地域の住宅において特徴的な点は、玄関・客間前方の底下屋であり、奥行き2.5メートル近くを主屋より持ち出すことで柱のない開放的な軒下空間をつくりだしていることにある。つまり、玄関・客間境の内法高さに差鴨居を渡しその端部を外壁より半間突き出す。この差鴨居の一端は長者柱によって支えられるがそのもう一端は外壁筋の客間・玄関境の通し柱である。そのためこの通し柱には平角材が用いられこの平角柱を差鴨居が突き抜ける。跳ね出された差鴨居の先端には桁行きに梁が渡され、玄関・客間前面の差鴨居に立てられた束を支点として半間間隔に腕木を出しその腕木の上に先の桁行き梁よりも1尺ほど前面に迫り出して出桁を設ける。さらにその上部にも同様の方法を繰り返して軒桁がさらに1尺ほど迫り出して設けられるが、この半間間隔の腕木のうちひとつ置き、すなわち1間間隔を曲がりのある腕木として最終の出桁を受けている。また跳ね出された差鴨居にかかる桁行き梁は一方は脇玄関の壁内に渡された差鴨居で支えられるが、もう一端は客間の床の間隔柱から軒にある独立柱へ差鴨居を渡し受けている。そのためこの桁の下部を4.5間近く開放し、柱のない軒下空間をつくりだしている。この独立柱を「乞食柱」と呼び、それゆえこの跳ね出してつくられた底下屋部分を「乞食守り」と呼ぶ人もいる*2。また出桁を受ける腕木を「跳ね出し」あ

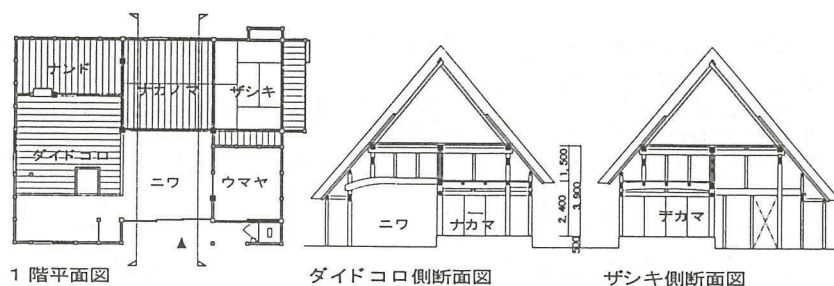


図2 旧敦賀市杉著(現日本民家集落博物館に移築)

るいは「掛け出し」と呼んでいる。

以下の節では積層する「テンピン」をもちいる独特の屋根架構と玄関前の軒下架構の成立過程を、茅葺きの例にさかのぼり考察することにする。

3. 茅葺き住宅の架構形式の発展過程

上中町周辺の農家住宅の平面形式は敦賀市から小浜市にかけて広く分布する若狭Ⅰ型とよばれる前土間平入りの住宅であり、図2に示すように、前面をダイドコロ・ニワ・ウマヤ（ウマヤ消滅以降は「へや」と呼ばれる若夫婦世帯の寝室となる）の土間部分とし、後方をナンド・ナカノマ（クチノマ）・ザシキの部屋部分とする。この例のようにダイドコロ・ナンド境とニワ・ナカノマ境はダイドコロを広くする1間程度の喰い違いがあることが一般的であり、ザシキを2間四方とする場合はザシキ・ナカノマ境とニワ・ウマヤ境にも半間の喰い違いを生じることにより若狭Ⅰ型の間取りの特徴がある。この

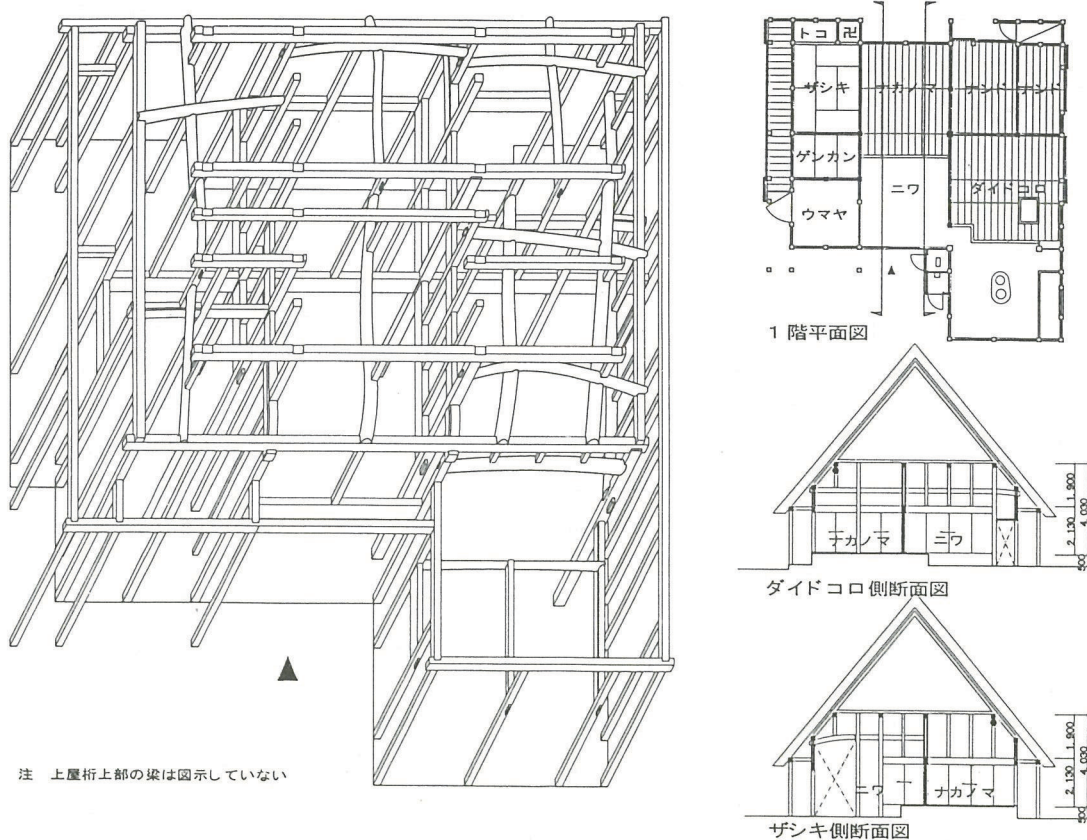


図3 旧上中町有田(現おさごえ民家園に移築)

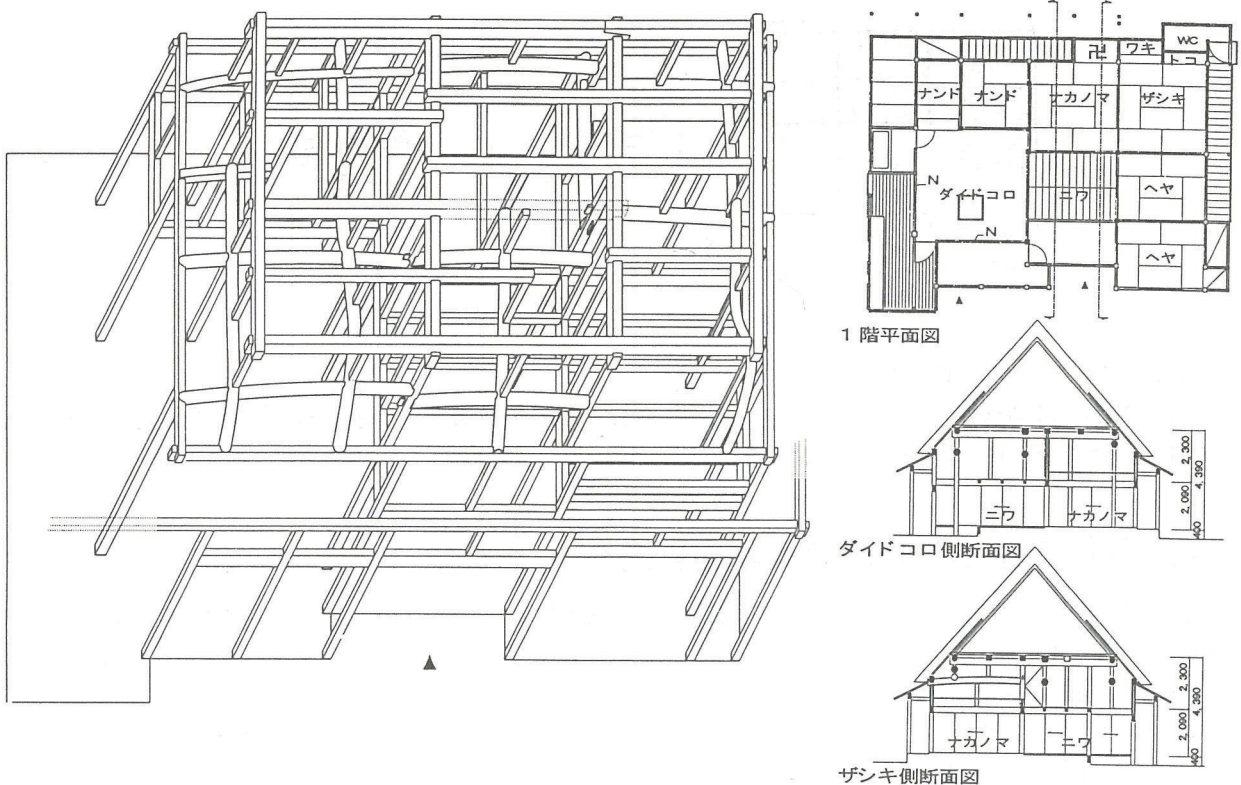


図4 三方町北前川

住宅の上屋の梁間は3間であるが、四周に半間の下屋を取り込み、さらに土間前面の他一部で茅屋根を葺きおろしている。また断面図からわかるように上屋桁を受ける上屋梁を大黒柱が支えることも若狭I型の特徴である。この住宅では又首は全て上屋の高さの梁桁にささっているが、本稿の対象としている上中町周辺の茅葺き住宅では平方向の又首は上屋桁にささるものの、妻方向の又首は下屋桁の高さにささっている。

図3は上中町有田からおさごえ民家園に移築保存されている18世紀前半と推定されている岡本家である。上屋梁間3.5間の住宅である。ダイドコロ前面にツノヤを張り出すためニワ・ナカマ境とナンド・ダイドコロ境が喰い違っていない点で一般的な若狭I型の間取りとは異なり、大黒柱は上屋の高さにある桁行き梁を直接支え屋根荷重を負担する柱ではないこと、又首は全て下屋桁の高さにささっていることなど上屋部分における架構は特異な点が多い^{※3}。当住宅の上屋より下部の架構は、部屋境の大半を差鴨居で固め、大黒柱桁行き通りの差鴨居より立ち上がる束から下屋桁へ梁行き梁を渡すことで上屋桁を支え、上屋と下屋を一体的に架構していることに特徴がある。ダイドコロ上部ではこの梁行き梁の他に2本の桁行き梁が渡され井の字の梁組となっている。またダイドコロ上部の下屋隅部は「よごれ柱」と呼ばれる当住宅で最も太い7寸角の柱であるが、この「よごれ柱」から梁行き・桁行きに渡された梁に立つ束によってダイドコロ上部の下屋外周の梁桁を受けている。このダイドコロ上部の井の字架構、そして「よごれ柱」を基点として桁行き・梁行きに梁を渡し下屋の梁桁を受ける方法は明治後期の瓦葺きとなっても残る架構であり、若狭I型の特徴である。また図2同様、下屋の四周は茅屋根を葺きおろしている。

図4は三方町北前川にある上屋と下屋からなる梁間3.5間の住宅である。茅屋根を葺きおろしていた部分を戦後瓦葺きの庇下屋に改造している。ダイドコロ上部の架構は天井と中二階床板を張る改装がおこなわれているために一部で不明である。建築年代は280年前というが定かではない。大黒柱は図2と同様上屋梁を支え屋根荷重を受けている。図3と比較すると、ザシキ・ナカノマ境・ザシキ・ヘヤ境には指鴨居が設けられるもののザシキに面する部分では長押を廻すために鴨居の厚さだけにみせて

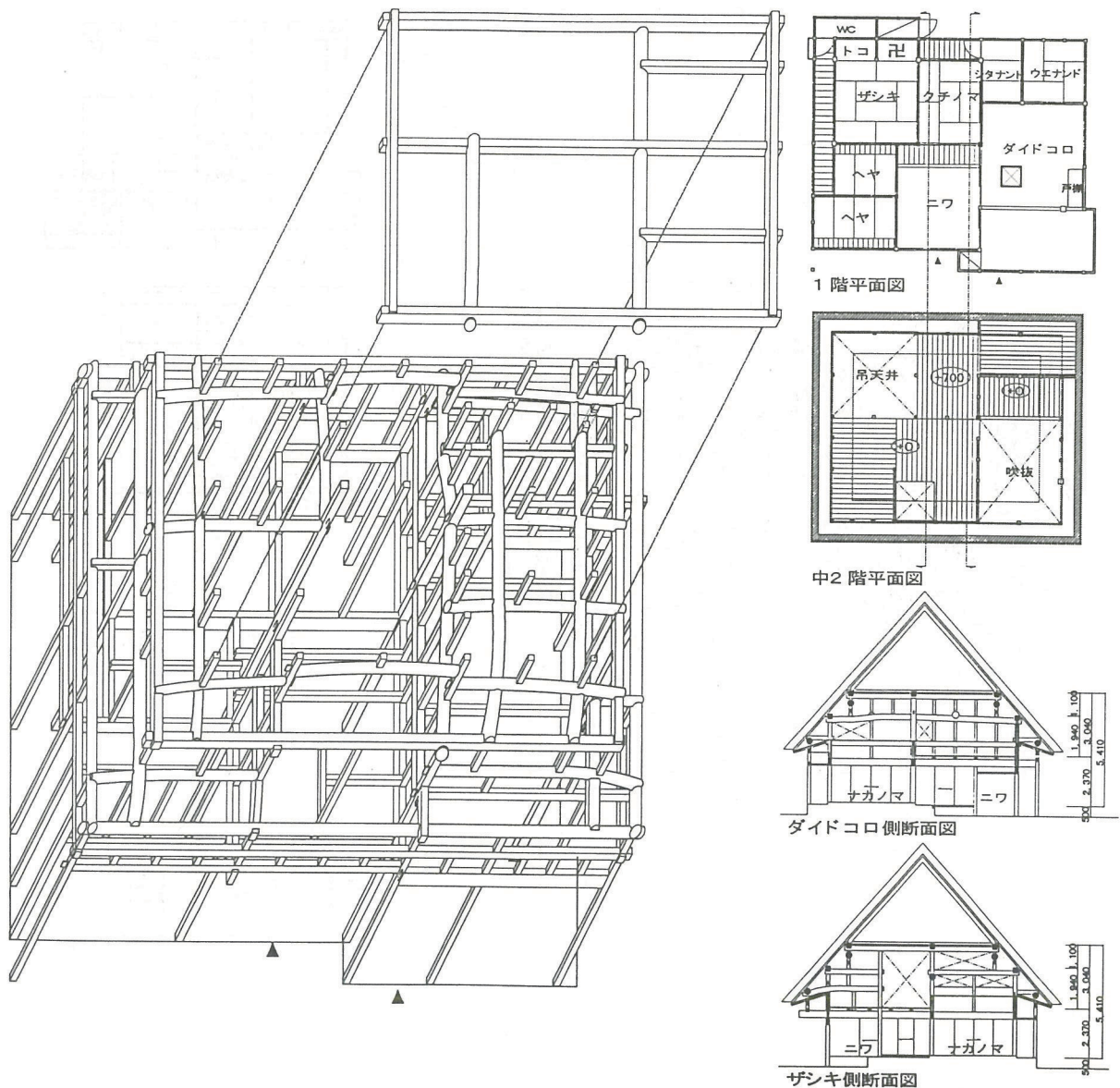


図5 上中町大鳥羽

いる。そのためその上部には長者柱から桁行き・梁行きの梁を下屋根に渡しており、その点であたらしい。またニワ・ナカノマ・ヘヤ上部に中二階を設けているが⁴⁾、その使い勝手のためにナカノマ上部では梁行き梁が省略されている。同じ中二階のあるニワ上部に梁行き梁が残っているのは、1階の天井高の違いからニワ上部はナカノマ上部よりも40cm程度中二階の床高さが低いためと考えられる。若狭I型では当初は図3のように中二階は主屋の一部に限られており梁行き梁が多くても支障はないが、当住宅のように藁を収納する目的から床が張られ広い収納空間を茅屋根のツシとは別に設けるようになると、中二階の使い勝手から下屋高さの架構は上屋外周部に上屋を受ける梁行き・桁行きの梁を渡すようになる。つまりこの住宅のダイドコロ上部及びザシキ上部のように、上屋を受けるために下屋の高さで桁行きと梁行きの梁を交差させその交差部に上屋を受ける束を立てる架構をとるのであり、上屋の屋根荷重を分散して桁行き・梁行きの下屋根へ伝えるようになる。

以上からこの地域における江戸後期の農家住宅の架構は、前面土間部分と背面部屋部分の境に柱を立て指鴨居で固め、ここより立ち上がる束から上屋と下屋の間に梁行き梁を渡すことで上屋と下屋を一体的に架構するかたちから、中二階の利用を目的としてダイドコロ以外では次第に部屋中央に位置する梁行き梁を省略させ、上屋の屋根荷重を上屋外周部の下屋高さに渡された桁行き・梁行きの梁に

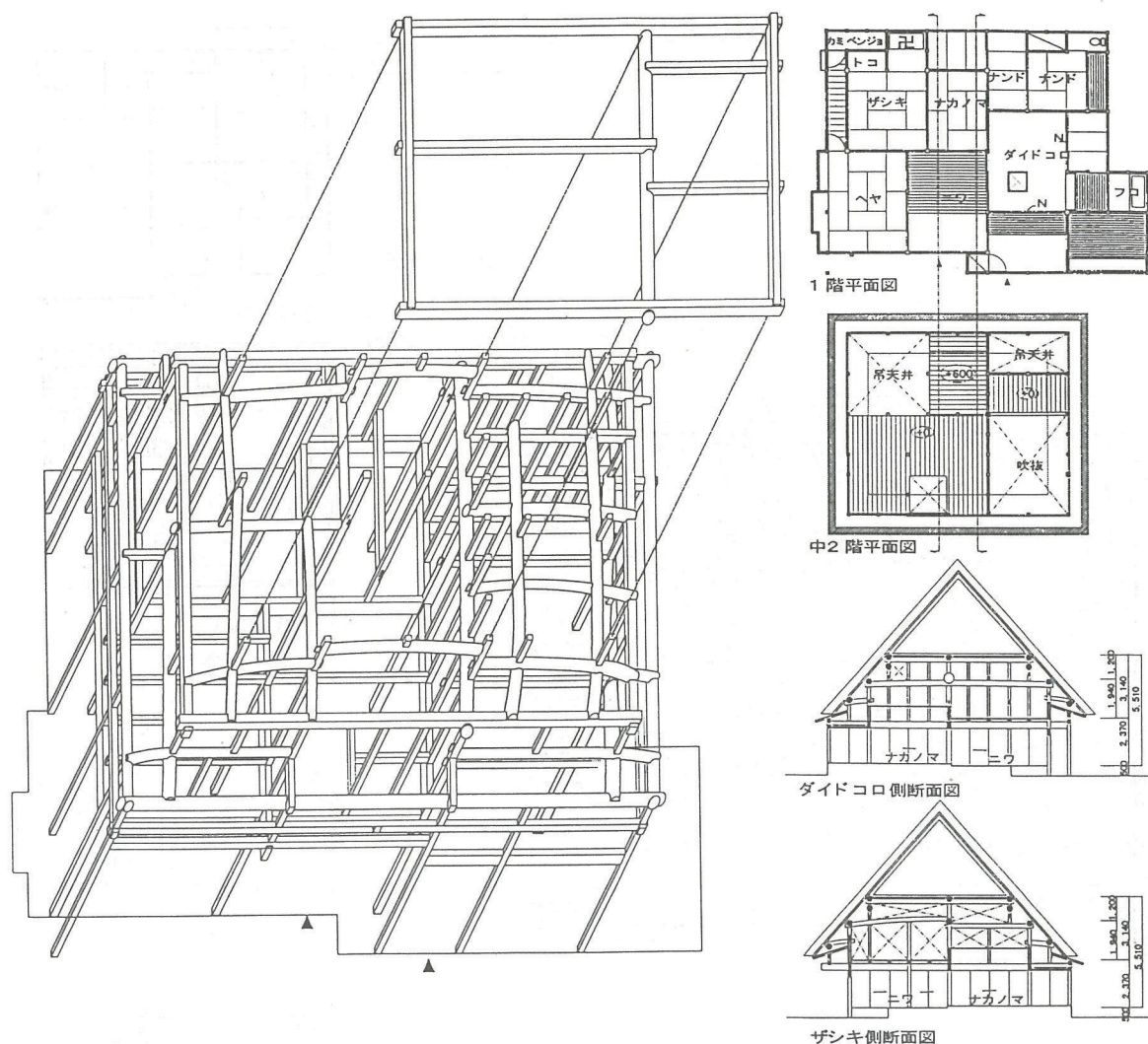


図6 上中町南

よって支えるように架構が整理されていく。

図5は上中町大鳥羽にある明治13年頃の建築の住宅である。架構図からわかるように上屋と下屋の他にそれまでは茅屋根の葺きおろしであった部分も主屋の中に取り込まれており、主屋の高さも高くなって中二階部分の高さはこれまでの2メートルから3メートル程度に変化する。この新しく取り込まれた部分の下屋空間をここでは「下々屋」と呼ぶことにする。架構は上屋外周部の下屋の高さで梁行き桁行きに小屋梁を渡し、その四隅は下屋桁までのばし互いに小屋梁を交差させ、交差部に束を立て上屋を支える。そしてその下屋桁を支えるために、ガシキの桁行き下屋通りでは下屋柱が直接下屋桁を支持するが、そのほかの部分では上屋の場合と同様の方法を繰り返す。すなわち下屋外周部の下々屋の高さで桁行き梁行きに小屋梁を渡し、その交差部に束を立て下屋を支る。この梁架構は上屋あるいは下屋の四隅に必要な柱を省略するためのものであるから、ニワとナカノマの上部では「下々屋」の高さの桁行き梁は不必要であり設けられていない。一方大黒柱梁行き通りでは大黒柱は上屋梁を直接支えているが、下屋の高さでは大黒柱から左右の下屋桁へ折置組として梁を渡たし、その梁から立ち上がる束によって上屋桁を支持している。従って大黒柱梁行き通りでは断面図からもわかるように上屋と下屋の高さで梁行き梁が入り、下屋高さの梁行き梁に半間ごとに立てられる束によって上屋を支える構成となる。下屋の高さの梁行き梁のうちナカノマ側の梁は図4にもあったガシキ内に差鴨居を見せないための梁であるが、ニワ側の梁は図3、図4では存在していた上屋柱を省略するための梁

であり、ダイドコロの井の字に組まれた梁行き梁を受けるためにはもはや差鴨居から立ち上がる束だけでは支えきれなくなって新たに設けられた梁と考えられる。さらにこの住宅には大黒柱から下々屋の高さにも下屋柱へ梁を渡し、都合3本の梁行き梁で大黒柱の立つ上屋と下屋とを固めている。一方長者柱側では中二階として利用するため、またザシキとへやが若狭Ⅰ型特有の喰い違いを示しているために梁行き梁は大黒柱側ほどではなく、ザシキ側では長者柱から下屋の高さで下屋側へ梁を渡たすのみである。またへや側ではニワーへや境の中央に立つ上屋柱から外側部分ではほぼ大黒柱側と同様の3重の梁架構がなされている。とくに下々屋の高さの梁はニワーへや境の中央の上屋柱から直接下々屋の桁を受けるように跳ね出されており、この跳ね出された梁の端部は同じ通りにあるニワーへや境の中央の上屋柱から跳ね出された差鴨居によって受けられ、この下々屋の梁架構を隠すように化粧垂木の庇屋根が設けられている。この差鴨居の跳ね出しはニワーへや境筋の下々屋通りの柱を省略するためのものであり、図1の新築住宅に見られた「乞食守り」の原型に当たるのもであるが、これは上屋・下屋・下々屋の3層構成の屋根架構になって初めて現れた造りであるといえる。

図6は上中町南にある上屋梁間3.5間の住宅で、建築後100年程度は経過しているという。住宅規模ならびに上屋・下屋・下々屋の3層からなること、その他の架構形式もほぼ図5と同じである。しかし特徴的な点は、図5では大黒柱は上屋まで達していたが、この住宅の下屋の高さの梁行き梁は大黒柱で途切れることなく下屋柱間を1本の梁で渡しており、大黒柱はこの下屋の高さの梁で止まっていることである。そのため上屋梁はこの梁に立てられた束によってのみ支えられている。一方長者柱は上屋まで達しており、ザシキ側では下屋の高さで長者柱から下屋側へ梁を渡たしている。へや側では間取りの喰い違いがあるために長者柱からの桁行梁より下屋桁へ梁行き梁が渡されている。従って図5では上屋柱は大黒柱・長者柱・へやニワ境中央の柱の3本あるが、この住宅では上屋柱は長者柱1本のみとなっている。しかし茅葺き住宅において太い柱といえば大黒柱とナガシ側にある「よこれ柱」であり、長者柱は他の柱と変わらない太さでしかない。長者柱が太くなるのは茅葺きから瓦葺きにかわってしばらくしてからのことである。

このように江戸後期には上屋と下屋の2層構成であったものが、明治期には下屋の高さの架構を繰り返して上屋・下屋・下々屋の3層構成になり、収納空間としては十分天井高のある高い中二階を形成する。また大黒柱梁行き通りでは上屋・下屋の高さでそれぞれ梁が渡される。そのなかには大黒柱が上屋梁まで達せず下屋の高さの梁を支えるものもあり、上屋と下屋が分離する傾向にあるといえ、また上屋柱の数も著しく減少する。

4. 瓦葺き2階建て住宅の架構形式の発展過程

茅葺き屋根は50度程度の屋根勾配のある入母屋屋根であるが、2階建て瓦葺きになるとほぼ5寸勾配のわずかに起りのある切妻の屋根へと変わる。

図7は上中町神谷にある築後120年以上は経過するという梁間4間の瓦葺き2階建ての住宅である。2階部分は、ダイドコロ上部を吹き抜きとして土壁により囲うほかはザシキ上部も含めて全面に床を張って茅葺きより広くするものの、1階の部屋の天井高の違いがそのまま2階床に反映して段差は大きくその点で茅葺きの中二階とかわらない。屋根架構は図1の新築住宅の屋根架構と類似している。つまり両妻面及び部屋境のほぼ2間間隔に梁行き梁（「ハリ」）が渡されその上に「1間テンピン」「2間テンピン」が短い束を介して積まれ、それら4組の積み重なった梁を上部では1本物の地棟で、下部では幾分高さの異なる2対各3本の桁行き梁（「梁挟み」）で繋いでいることである。ただし、大黒柱梁行き通りでは大黒柱が「2間テンピン」まで伸びているために「ハリ」は大黒柱で切れている。またほぼ2間間隔の「ハリ」を等分する位置に登り梁が地棟に対して渡され、登り梁の中腹を「梁挟み」が支えている。従ってこの地棟は登り梁を支える材であることがわかる。また登り梁には、登り梁の勾配と屋根勾配とが異なるため母屋を受ける短い束が立てられている。この登り梁は建ちの低い2階部分を収納空間として利用するためには必要条件である。それでも、「梁挟み」の高さはナカノマ

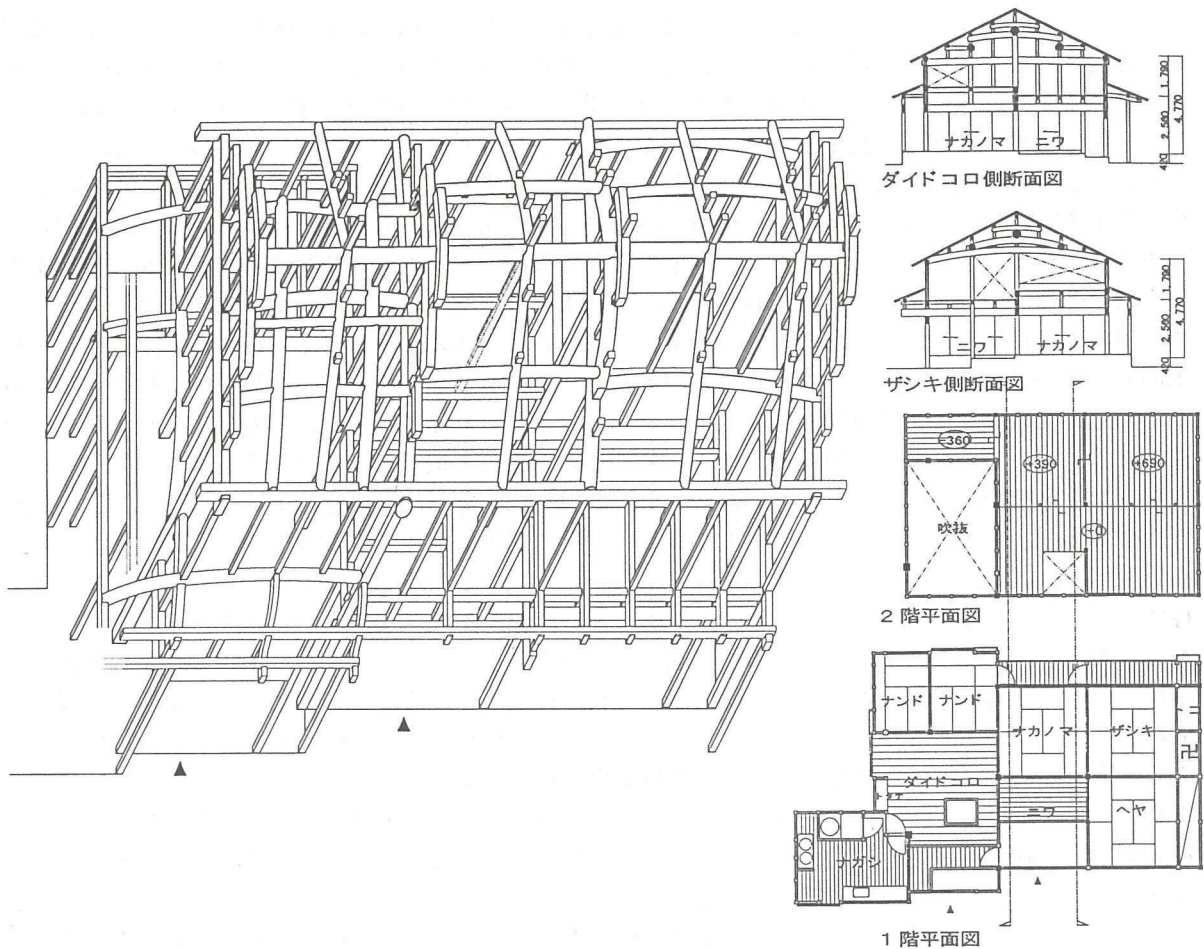


図7 上中町神谷

及びザシキ上部の天井が高いことからナカノマ上部の2階床面から「梁挟み」下端までは1.5メートルにも満たなく、図5や図6の下々屋を設ける茅葺きに比べると2階部分は「梁挟み」が低くかかり使い勝手は著しく悪い。では「梁挟み」は何故に必要とされたのか。

2階の軒桁の高さはニワ上部の2階の床面を基準にすれば6尺程度と低く、これは茅葺きの下屋桁の高さにあたる。またダイドコロ上部の井の字に組まれた梁架構は2階軒桁の高さにかかるが、この梁組は茅葺きでは下屋桁の高さの梁組である。従って2階軒桁を茅葺きの下屋桁に対応させて図5と比較してみると、図5では大黒柱から長者柱側を除く3方向に下屋桁の高さで梁が渡され、その梁行き方向の2本の梁の下屋桁から半間入った位置に上屋桁を受ける短い束が立ち、この束に上屋桁を受ける桁行き梁が両側から渡されるとともに、この束は大黒柱と併せて上屋梁を受けている。一方図7では大黒柱からやはり長者柱を除く3方向に軒桁の高さで梁が渡され、その梁行き方向の2本の梁の軒桁から1間入った位置に短い束が立ち、この束に両側から「梁挟み」が渡されるとともに、この束は大黒柱と併せて「2間テンピン」を受けている。従って「梁挟み」にあたるものは茅葺きの上屋桁を支える桁行き梁であり、「2間テンピン」は茅葺きの上屋梁にあたることになる。「梁挟み」の位置が茅葺きの下屋桁より半間入った位置から瓦葺きでは2階軒桁より1間入る位置に移動する理由は、「梁挟み」が登り梁の中央を支持するためでもあるが、茅葺きと瓦葺きの屋根勾配の相違により、桁高さを基準にして茅葺きの下屋桁から半間入った上屋桁の高さと、瓦葺きの軒桁から1間入った「2間テンピン」の高さとはほぼ同じとなり、梁行き梁に立つ短い束に対して両側から桁行き梁を納めそのうえに梁行き梁の梁尻を載せるためには、茅葺きよりもさらに半間入ることが必要であったと考えられる。一方茅葺きの下々屋部分に相当する架構はダイドコロ及びナンド部分で桁行き・梁行きに交

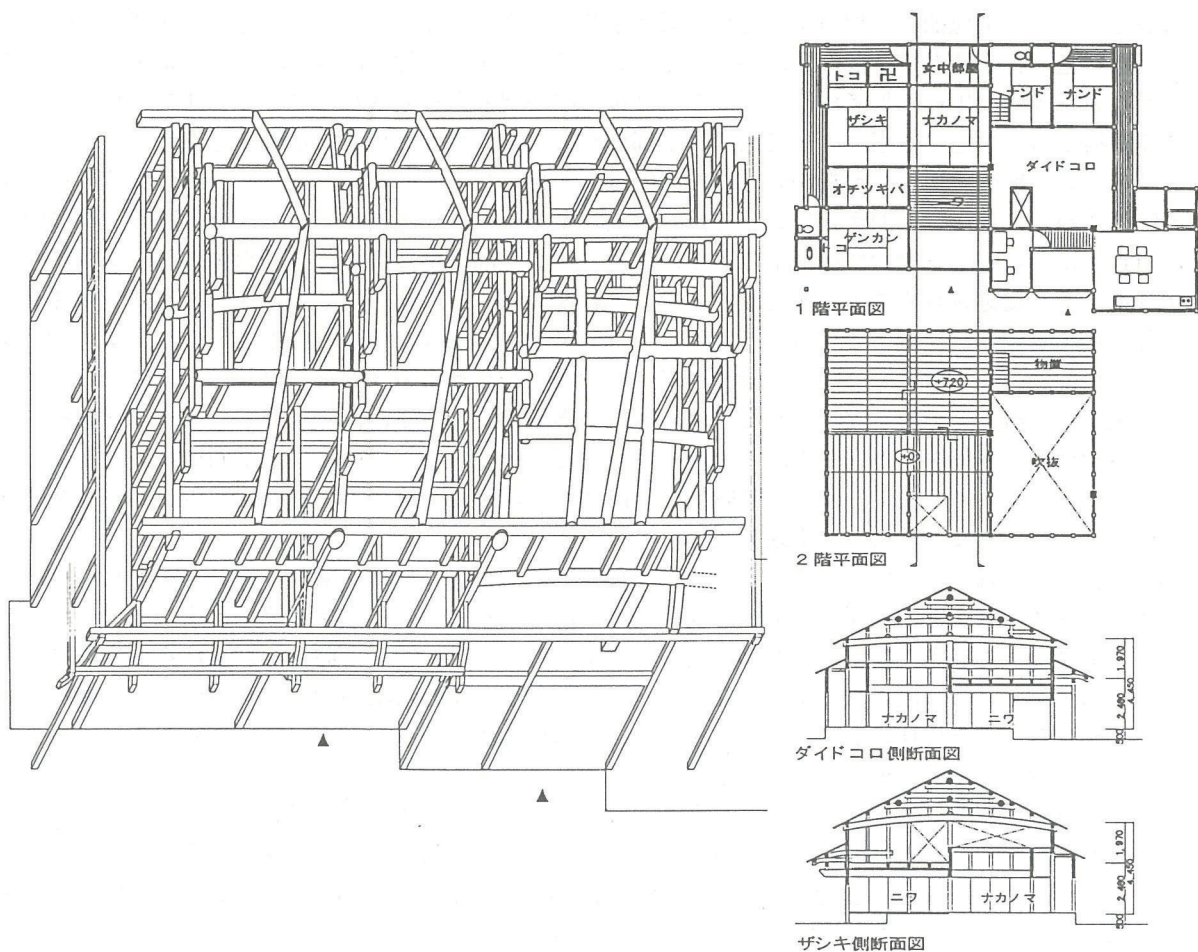


図8 上中町日笠

差させた梁の交点から束を立て2階軒桁をうけるかたちで残るが、主屋の他の部分では胴差しが設けられるため消滅する。またニワへや前面の底下屋部分においては、茅葺きの下々屋桁は底下屋の軒桁に変わり、この軒桁は図5、図6の例と同様ニワへや境の差鴨居を跳ね出すことで支えられている。

図8は上中町日笠にある100年程前の建築という梁間5間の大きな住宅である。調査した事例から明治後期に建てられた瓦葺きの住宅は梁間4.5間のものが多い。これは明治初期の茅葺きが図5、図6のような上屋梁間3.5間であり、下屋を含めると4.5間になるためと推測される。まずダイドコロ以外の架構について見ていくことにする。ほぼ1間間隔に積み重ねられたテンピンをもつ「ハリ」と登り梁を交互に渡しており、概略は図7と同様である。しかし大黒柱は「ハリ」を直接支えており、「ハリ」より上には延びていない。また地棟は「1間テンピン」に渡され、「梁挟み」も3間テンピンの上端に渡され図7よりも高い位置に置かれている。それは「梁挟み」と地棟はともに登り梁を直接受ける材であり一対となって移動するためである。この住宅も2階の軒高は図7とほとんど変わらなく低い。図7は上屋・下屋・下々屋の3層構成になる茅葺きの中二階よりも「梁挟み」が低い位置にあることから収納空間としての条件を悪くしていることを先述したが、それを改善するためには2階の床高が高いナカノマ・ザシキ上部でも「梁挟み」の真下で人の背が立つ程度には高くする必要があり、この住宅のように地棟を一段高い位置に置くようになったと考えられる。この地域の明治後期以降に建てられる住宅の全てがこのように「1間テンピン」の上に地棟を置くものである。この住宅では地棟の下にも桁行き方向に梁（「下地棟」）が渡され、地棟を束により受けているが、図7では地棟を胴差しより立てられる柱で支えており、この「下地棟」は地棟を受ける柱を省略するための梁であることが

わかる。この「下地棟」に相当する桁行き梁は茅葺き住宅にも存在しており、たとえば図5・図6の茅葺き住宅の長者柱あるいは大黒柱から下屋の高さで下屋側へ桁行きに渡されている梁がそれである。しかし茅葺きの大黒柱―長者柱間ではこの梁は中二階の利便上省略されることが普通であり、かわって差鴨居から立ち上がる束によって大黒柱上部の桁行き梁（地棟に相当する梁）を支えている。一方ダイドコロ上部の架構は、軒桁の高さで井の字に梁が組まれていることもあって一層複雑である。井の字の梁組とは別に「3間テンピン」の高さで登り梁を受ける「梁挟み」と地棟を受ける「下地棟」が桁行きにかかる。一般的には図7のようにダイドコロ上部で地棟は井の字に組まれた梁から立ち上がる束により支えられることが普通であって、この住宅のように新たに「下地棟」を設け、棟通りに合計3本の桁行き梁を縦に並べることは珍しい。梁間が5間と大きいためと考えられる。またニワ及びヘヤの前面の底下屋部分は図5と同様ニワ―ヘヤ境の差し鴨居を半間持ち出し、そこに立てられた短い束に桁を渡しその桁を支点として「跳ね出し（掛け出し）」とよばれる湾曲した梁を1間間隔にニワ―ヘヤ前面の差鴨居より立ち上がる束から持ち出して出桁を受け、軒先まで1間近い奥行きのある深い軒下をつくっている。しかしこの時期の2階建ての段階でも跳ね出された差鴨居を受ける外壁側の柱は通し柱ではなく差鴨居の下端で止まっている。

以上初期の瓦葺きの架構から、茅葺きの上屋桁を受ける桁行き梁は「梁挟み」として登り梁を受けることで残り、茅葺きの上屋梁は地棟を受ける「2間テンピン」に相当する梁であることがわかった。そして階高の低い2階ツシ空間を有効に利用する工夫から「梁挟み」は高く配置され新しく設けられる「3間テンピン」に渡されるようになる。それにともない屋根勾配の関係から地棟も「1間テンピン」にかかる。また地棟は2間スパンの中央を当初は柱で受けていたがその柱は省略され、これより低い位置に渡される「下地棟」からの束によって支えられることになる。

こうした架構形式の住宅は、2階部分を藁の収納を目的としたツシとして利用するために工夫・発達したものであり、2階部分に居室が設けられる戦後以降、2階の階高は徐々に高くなる。この変化にともない登り梁によって部分的にでも階高の高い空間を確保する必要はなくなり、登り梁は陸梁（「ウシ」）に変わる。又この「ウシ」にも「ハリ」と同様「1間テンピン」「2間テンピン」が重ねられる。一方「梁挟み」の高さも軒桁よりも何段か高く配置する必要はなくなり、陸梁の高さで共通して渡されることから一本ものの梁に変わる。かつて「梁挟み」は登り梁を支えていたが丸太の反り具合の関係から「ウシ」が「梁挟み」を支えるようになる。このような変遷を経て図1のような屋根架構で現在この地域の農村住宅は建てられているといえる。また前面の底下屋においては、ほぼ2間間隔の部屋四隅に立つ柱は通し柱となることから、ニワ―ヘヤ境の跳ね出された差鴨居を受ける外壁側の柱は、当初差鴨居下端で止まっていたが次第に平角材の通し柱とし、差鴨居を内側の柱まで貫通させるようになっていく。

一方瓦葺きの住宅には、これまでみてきたような建築当初から瓦葺き2階建てとするものの他に、建築時には茅葺き住宅であったものを瓦葺きに改めるものが存在する。この屋根の改造による瓦葺きを「合掌つぶし」と呼んでいる。

図9は上中町大鳥羽にある「合掌つぶし」による住宅例である。主屋の建築は100年以上経過しているとのことであり、大正10年に現在の瓦屋根に改造している。その架構は断面図からわかるように、茅葺きの本体の架構はそのままにして、旧上屋桁よりも半間入った位置に「梁挟み」を桁行きに渡し、その上に「1間テンピン」「2間テンピン」をのせ、その上部桁行きに地棟を渡すものである。

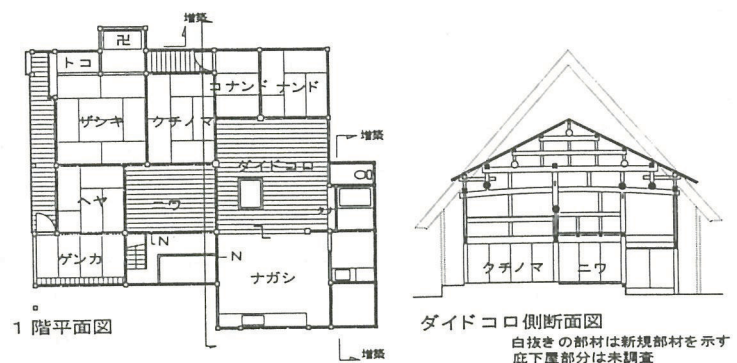


図9 上中町大鳥羽

旧上屋桁は母屋と兼ねられており、そのため軒桁は旧上屋桁よりも低く、軒桁は下屋桁より立てられた束によって支えられ、半間内側の通りにある上屋梁を受けていた束から軒桁を受ける束に対して繋ぎ梁を渡すことで新設された軒と本体とを緊結している。またこの住宅も上屋・下屋・下々屋の3層からなる住宅であったが、かつて茅屋根によって上屋と同じ屋根に囲われていた下々屋部分は、屋根形状の変更にもない主屋とは別の底下屋に改造されている。この例からわかるように、「合掌つぶし」の場合瓦葺きとすることによって屋根の高さはかなり低くなるが、これはこの地域の瓦葺き2階建ての住宅が茅葺きの中二階部分を2階床部分として発展させていくために、新たに2階部分を建て増す必要がなかったためである*5。

5. まとめ

現代の木造軸組工法による瓦葺きの木造住宅の屋根架構は梁と束による「和小屋」の架構をとることが多いが、伝統に対する保守性が強い農村部の住宅では茅葺きから瓦葺きにかわっても標準的な和小屋となることなく、一時代前の住宅にあった部材を役割を変えながらも次の時代の住宅の部材へと姿を変えて残し、かつ発展させていることが明かとなった。また玄関前の底下屋においても同様のことがいえる。軸組架構には技術と一対になった文化がある。軸組架構が継承される理由は、その文化の中にその地域の木工そして住まい手の両者に共通した価値観が反映されているからに他ならない。

また嶺南は嶺北に比べて積雪の少ない地域であり、その地域でこれまで見てきた驚くほど頑健に思える架構の住宅を建てていることは、気候風土的な要素よりもはるかに土着文化的な背景が強く住宅に影響していることを示している。

なお最後ではありますが、調査にご協力いただいた住まい手の方に深く感謝いたします。

〈注〉

- *1 テンピン」は「天秤」が訛った言い方である。
- *2 文献1によれば、小浜付近の農家住宅において土間正面入り口上部の壁面の外側を通る桁を受けている梁を「乞食守り（乞食まぶり）」と呼ぶとある。
- *3 岡本家には架構図からもわかるようにガイドコーナンド境、ニワーガイドコ境、ナカノマーナンド境、ニワーウマヤ境には大黒柱あるいは長者柱と下屋とを緊結する材が下屋の高さで入り、その材は一部を貫状に厚みを薄くして差鴨居に立つ束を貫き通す独特の架構がある。この繋ぎ梁とも大貫ともいえる部材は後期の茅葺きには梁となって現れる部材であり、18世紀前期で既にこの梁を先取りしていたともいえる。また通常と異なり現在下屋桁にささっている叉首組は、文献3によれば当初は上屋桁にささっていた痕跡があると記されている。
- *4 ヘヤ上部の中二階は当初からのものと思われる扉と窓が備わった女中部屋がある。ここは2階建てとなって一番先に2階の居室となる部屋でもある。
- *5 先茅葺き屋根から瓦葺きに変更することを越前II型の分布する福井周辺では「屋根あげ」と呼び、棟の高さは瓦葺きにしたものとはほぼ変わらない。それは越前II型での2階部分は茅葺き時の屋根部分である「つし」が発展したものであるからであり、農家住宅の2階化における2階部分の形成過程には2通りの方法があることがわかる（文献13参照）。

〈参考文献〉

- 1) 「日本民家語彙集解」日本建築学会民家語彙収録部会,1985
- 2) 「建築大辞典」彰国社,1976
- 3) 「福井県史資料編14」福井県,1989
- 4) 「福井県の民家」福井県教育委員会,1970
- 5) 「滋賀県の民家」滋賀県教育委員会,1966

- 6) 「マキノ町在原伝統的建造物群保存対策調査報告書」マキノ町,1986,
- 7) 堀江亨,1994,「石川県鹿西町周辺の木造住宅における架構法の変遷に関する研究」,東京工業大学博士論文
- 8) 大岡実,鈴木充,宮沢智士,1960,湖北地方民家の編年と類型,日本建築学会論文報告集66
- 9) 鈴木充,1966,湖北地方の民家,建築雑誌81 (963),16-17
- 10) 玉置伸悟,1992,「北陸地方における農家住宅の変容過程に関する研究」,住宅総合研究財団
- 11) 樋口裕,1987,「北陸の農家住宅の風土環境」,福井大学修士論文
- 12) 伊藤裕子,1997,「北陸地方における農家住宅に関する研究」,福井大学修士論文
- 13) 奥田徹,玉置伸悟,1999,大野市における2階建て農村住宅の架構形式の変容過程,日本建築学会北陸支部報告集42, 243-246